

平成 1 8 年 1 1 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859）

旅をする蝶

10月に2回、友田地区でアサギマダラを目撃しました。翅（はね）を開くと10cmほどある大型のマダラチョウで、飛び方はふわふわとゆっくりしていて、好んでヒヨドリバナ等の花に集まります。その姿が大変優雅なことから人気の高い蝶です。翅の中央部が半透明の薄い水色（あさぎいろ）であることから「浅斑蝶」と名付けられたという由来があります。

市内の平地や丘陵部で見かけるのは年に1～2回で、見かけることができれば幸運でしょう。時期が決まっていて、秋の9～10月の目撃記録が大半です。5月下旬から6月に見ることもあります。

実は、この蝶は暖かい地方で冬を越します。食草はガガイモ科の植物ですが、ガガイモ科なら何でも食べるわけではありません。非休眠状態の幼虫で越冬するため、常緑のガガイモ科植物がない地方では越冬できません。青梅から一番近い所で越冬できているのは高尾山の近くで、ここでは常緑のキジョランが食草になっています。青梅市ではキジョランが見つからないので、5月下旬から6月に見るアサギマダラはこの辺から飛んで来たのかなと推測されてきました。

古くから長距離移動する蝶と考えられていて、春から初夏にかけては南から北へ、また低標高地から山地へ、秋になると逆に北から南へ、また山地から低標高地への移動が指摘されてきました。この実態を明らかにしようと、蝶を捕獲して翅に油性マジックで記号を付けて放すというマーキングが始まったのが1975年といわれています。マーキングされた蝶が再捕獲されると、どこから飛んで来たかが分かります。このマーキング調査が一躍脚光を浴びることとなったのは1981年です。この年、5月31日に鹿児島県の種子島でマークされた個体が7月16日に福島県白河市で再捕獲され、直線距離にして約1100kmの長距離移動が確認されました。これを機にアサギマダラのマーキング調査が全国に広がり、最近では2000年初夏から夏に台湾陽明山から滋賀県、2001年秋には逆に奈良県生駒山から台湾恒春半島、2002年秋には愛知県伊良湖岬から沖縄県南大東島、山形県蔵王から三重県への移動等毎年次々と新しい知見が出ています。去年は、10月1日に愛知県田原市でマークされた個体が海路1000kmを飛んで、12月30日に小笠原諸島の父島で再捕獲されるというニュースもありました。もっと短い距離での移動例はたくさん集積されています。今年全国でマーキングされた個体は数万頭に及ぶと推定されます。

奥多摩の三頭山、雲取山、柳沢峠等では、7月下旬から8月の時期によくアサギマダラを見ます。これは5～6月に南の方から青梅等を経由し飛んで来た個体

が、山地にある落葉ガガイモ科植物のイケマやコバノカモメヅルに産卵し、そこで発生したものと考えられています。イケマからは幼虫が確認されています。この時期に青梅市内でアサギマダラが見られるのは御岳山と高水山の山の上だけです。もっと標高の高い地域への移動途中なのか、そこで発生しているのかまでは分かっていません。

奥多摩山地で夏に発生したアサギマダラは涼しくなると山を下り南へと向かいます。市内の低標高地で9月後半から10月に見るこの蝶は南へ移動する途中の個体と思われます。奥多摩の山地でも数は少ないながらマーキングが行われています。この蝶を見たら翅の半透明の水色の部分にマジックの書込みがあるか注意してみてください。捕獲して書込みを写真に撮るかメモすると、誰がいつどこでマークした個体か全国ネットで情報が共有されているので分かる仕組みになっています。そのうえで再度放すと、また次の中継地で見つかる可能性もあります。それが房総半島の清澄山になるか、伊豆半島か、愛知県の知多半島か興味の尽きない世界です。

(文責 久保田 繁男)